

市民の熱き思いで立ち上がるまちづくり活動 ～五條市～

奈良県の中西部にあり、和歌山県と県境を接する五條市は、古くから東に伊勢街道、西に紀州街道、南に西熊野街道、北に大和街道が通り、さらに北西へは金剛山を越え河内や和泉・堺へと通じ、南和地域の経済産業の中心であった地である。また、幕末の動乱期には明治維新の魁（さきがけ）となった天誅組の変が起こるなど歴史の転換点で大きな動きのあったところでもある。

市内では、まちがたどってきた歴史を振り返り後世に伝えていくとともに、まちづくり、まちの活性化につなげていこうと、いくつかのNPOや民間グループが立ち上がり活動を行っている。

今回は、南和地区の中心都市である五條市でのまちづくりの取り組みを紹介する。

●古いまちなみを復活し、まちのにぎわいを取り戻す ～新町塾～

新町塾は、町の青年会が中心となって発足させたまちづくりグループである。自分たちの住んでいる「まち」の成り立ち、発展、歴史のかかわりを知り、住民各自がそれぞれの立場で意見や考え方・疑問点等を話し合える場をつくらうということで、1990年に結成された。

塾の名前の由来である「新町」は、かつては五條のまちの中心であったところ。江戸時代の初め、関ヶ原の戦いで軍功のあった松倉重政が大和二見城主として入城し、城下町振興策として紀州街道沿いにほぼ100軒の商家を集め、新しい商業のまち「新町」をつくったのが始まり。以後、「新町」

は五條のまちの商業街として発展し、戦後に国道24号線が町を通るまでは五條のまちのメインストリートでもあった。

75年に奈良国立文化財研究所と五條市が行った調査によると、江戸時代の建物が77軒、明治時代の建物が19軒確認されている。

現在では通称「新町通り」と呼ばれ、土塀や格子戸のある旧家が軒を連ねる古いまちの風情を残す通りとなっている。

塾の立ち上げ当初は、内部での勉強会・飲み会などが中心であったが、92年には一般の人にも参加してもらえる公開例会を開き「まち」の歴史等について講師を招き、外へも働きかけながら学習を進めていった。それ以後、他のまちづくり団体との交流会、先進地視察などを行い、活動の範囲を広げるとともに、自分たちの「まち」を客観的な眼で見つめ直している。一方、具体的な活動としては、歴史的なまちなみにそぐわないものをチェックし、通りにある電柱やフェンスの色を塗り替えたり、県や五條市の補助金を使って、街灯をまちなみにマッチするものに付け替えるなど、具体的なまちづくりにも取り組んできた。

また、新町地区は97年に街並み環境整備方針について国土交通大臣の認可を受けており、道路のカラー舗装化、電柱の移設のほか、五條市の補助を受けながら、家屋などの新改築・改修時に外観を歴史的景観に調和するよう変更する修景施設整備にも取り組んでいる。

こうした住民主体の熱心なまちづくりが認められ、



古いたたずまいが残る新町通り



街灯や電柱、道路舗装もまちなみにマッチするものに修景

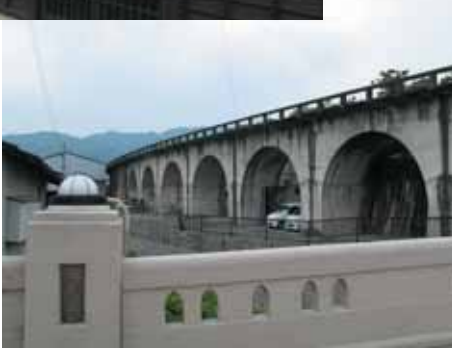
2000年に地域づくり自治大臣表彰を受けている。

同塾では、現在、古いまちなみへの修景を進め、まちの魅力を高めるとともに、次のステップとして国の重要伝統的建造物群保存地区の指定へ向けた取り組みに力を入れている。



04年に市がオープンした「まちなみ伝承館」

通りの途中には幻の「五新(五條～新宮)鉄道」が通る



フリーマーケット「かげろう座」

新町通りの長さは約1キロある。これだけ長い街道筋で古いまちなみが保存されているところは全国でも珍しい。毎年5月下旬にこの長い通りを使ってフリーマーケット「かげろう座」が行われる。

かつて宿場町として栄えた当時のにぎわいを再現し、通りの活性化を図りながら、歴史を感じるまちなみを多くの人たちに見てもらい、まちなみ保存への機運づくりにつなげようと、新町塾が93年から始めたものである。

「かげろう座」では、県内外から手作り品を中心とした、木工品・ガラス細工・手芸品やリサイクル品や軽食の店が並び、また、琴の演奏・人力車・バンド演奏・バナナのたたき売り・マグロの解体や名物の柿の葉すしの実演等が行われる。当初、出店数約70店、来訪者約2,000人で始まったが、07年には、出店数約400店、来訪者も約50,000人と大きく成長し、市外県外からも多く

の人が訪れる五條を代表する大きなイベントの1つとなっている。



初夏の一日、通りを訪れた人でごった返す(上)



地元の五條高校も出店(左)

● 歴史的事件の意義を問い直し、まちづくり

～「維新の魁・天誅組」保存伝承・顕彰推進協議会～

まちで起こった歴史的事件の意義を問い直し、市外のゆかりの地とも連携しながら、まちづくり、地域の活性化につなげていこうとする動きも市民の手で進められている。

05年9月25日に立ち上げられた「維新の魁・天誅組」保存伝承・顕彰推進協議会である。

幕末の動乱期、明治維新のわずか4年前に日本の歴史を動かす魁(さきがけ)となった事件が五條のまちで起こっている。攘夷倒幕の嵐が吹きすさぶなか、1863年(文久3年)8月17日に天誅組の志士30人が幕府の直轄地(天領)を治める五條代官所を襲撃。これがいわゆる「天誅組の変」である。中山忠光卿を頭に、吉村寅太郎、藤本鉄石、松本圭堂らが、天皇の大和行幸の露払いとして、倒幕の狼煙(のろし)をあげた事件である。市の中心部にある桜井寺には、一時、五條新政府が樹立された。

ところが、翌18日朝儀は一変して攘夷派が破れ、天皇の大和行幸が中止となり、天誅組の義挙

は大義名分を失ってしまう。その後高取城（高取町）攻めに失敗、吉野各地を転戦ののち翌9月に東吉野村鷲家口にて悲運の最期を遂げている。

こうした経緯から、天誅組については、長らく情勢判断を誤った暴挙、罪のない民を殺戮して世を騒がせただけの暴力集団とする見方がされてきた。しかし、天誅組が標榜したのは「一心公平無私」。「私を捨てて立ち上がった」志士の平均年齢は25.6歳と若く、そのほとんどが郷土や庄屋、神官・僧侶など当時の知識集団で、明治維新の魁として大和五條で、新しい時代を夢見て挙兵したものである。

このような天誅組の人たちの心に学び、天誅組の偉業を讃え、後世に伝えていこうと、同協議会が立ち上げられた。

同協議会は、県内の高取町、東吉野村、十津川村をはじめ、高知県、岡山県、愛知県など天誅組ゆかりの地との連携・交流、天誅組に関する講演会の開催、各種イベントへの出展などを通じて、関連各地への観光客誘致を図るとともに地域の活性化にもつなげることをめざしている。

同協議会では、「自分たちのまちである五條で、明治維新の魁となった天誅組の義挙があったこと、

天誅組の志士たちが志した『一心公平無私』を一人でも多くの人たちに理解してもらい、引き継いでいてもらいたい」と考えている。

また、同協議会では、NHKの歴史解説番組「その時 歴史が動いた」に取り上げられることを第一ステージの目標に掲げている。全国ネットの番組で取り上げってもらうことで、天誅組に対する関心を全国的に広げていこうと協議会設立当初から考えており、積極的な働きかけを展開している最中である。

●庄屋屋敷で市民交流を

～NPO法人「うちの館」～

現在、五條市北部の近内町では、かつての庄屋屋敷「藤岡家住宅」の保存・修復が進められている。歴史的な建造物だが痛みがひどく、「修理費は負担するので建物を活用してほしい」という当主の要望を受けて、市民有志が04年12月にNPO法人「うちの館」（田中修司理事長）を設立した。

藤岡家住宅は、金剛山への参詣道沿いにあり、約1,300㎡の敷地に、母屋、茶室、別座敷、蔵など10棟660㎡を有する。県教育委員会の調査では幕末から明治期の建築とされるが、母屋は約230年前に建ったという説もあるほどで、06年3月には国の有形文化財にも登録されている。

藤岡家は代々、庄屋や村長を務め、現当主の藤岡宇太郎さん（茨城県在住）の祖父・藤岡長和さんは地元の旧制五條中学から三高・東大へと進み、内務省に入省後は、佐賀、和歌山、熊本の官選知事を歴任した。また、石川啄木、森鷗外、佐藤春夫、与謝野鉄幹・晶子など多くの文人たちとも親交があり、雅号を玉骨（ぎょっこつ）と名乗り、俳人・文化人としても活躍、郷里に戻った晩年は「大和俳壇の王者」と称された人物である。

邸宅内には鷗外が揮毫した扁額や鉄幹・晶子の直筆書簡をはじめ、交流俳人と交わした短冊など貴重な資料が多数残っている。

現在進めている改修は、あと数年くらいかかる予定であるが、一部は今秋にもオープンする予定。



市立「民俗資料館」
（旧五條代官所長屋門）



五條・吉野魅惑体験フェスティバルにも参加
（06年）

NPO法人うちの館は、これらの資料を逐次整理・研究し、可能なものは公開していく方針である。また、改修後は、文化、芸術などを通して市民交流の場、憩いの場所としていこうと考えている。



改修が進む
藤岡家住宅
(玄関)

邸宅の後ろ
には金剛山
がみえる



●伝統の漁法「やな漁」を復活、観光の目玉に ～「吉野川やな漁保存会」～

昔から五條の人々は、まちの真ん中を流れる吉野川のほとりで、漁労を中心に豊かな生活文化を築いてきた。「古事記」や「日本書紀」には、吉野川で梁（やな）を使って漁をする人のことが記されている。

梁とは、川に竹を並べた大きな簀の子（すのこ）を掛け、ここに落ちる水をこして、簀の子の上に残る魚を捕らえる仕掛けのこと。古来、吉野川の川筋では、秋口頃から梁を使って落ち鮎やウナギ、ウグイなどを捕らえる「やな漁」が行われてきた。

近年は、吉野川の川筋のやな漁もみられなくなっていたが、伝統的な漁法である「やな漁」を復活させようと地元の漁協が呼びかけ、これに市、商工会、観光協会が同調して「吉野川やな漁保存会」が結成され、02年9月16日に吉野川で約50年ぶりに「やな漁」を復活させた。毎年9月上旬～10月下旬にかけて、市内の大川橋下流の吉野川

で昔ながらの漁法を楽しむ光景が見られるようになっていく。



観光の目玉としても期待される「やな漁」

■市民の手で立ち上がる五條のまちづくり

これまでみてきたように、五條のまちでは、市民グループなどによる新しいまちづくり、観光の活性化への取り組みが活発化してきている。自分たちのまちがたどってきた豊かな歴史や、市民が育ててきたまちなみ・生活文化などを再度見つめ直し、地域の魅力づくりに結びつけようとする試みが次第に花開こうとしている。

こうした動きが起こってきた背景には、五條のまちが持てる歴史文化資産の豊富さ、懐の深さが背景にあることは想像に難くないが、それにも増して、まちづくり、地域活性化にける市民のひたむきな熱意がある。それぞれの活動グループは、自分たちのまち・五條を良くしていこうと思う献身的な人たちによって支えられている。この思いは、天誅組の変で新しい国の姿を夢見て立ち上がった志士たちの熱い思いにも相通ずるものがあるかもしれない。

昨年6月にはまちの北部を京奈和自動車道（五條道路）が開通した。これに伴い中心部を通る国道24号線の混雑緩和は進んだが、逆に中心部を通らずに五條市を通り過ぎる車が増えている。さらには、隣接する和歌山県橋本市には敷地面積約90,000㎡の商業施設もできており、五條市の中心部の「吸引力」低下も懸念される状況にある。

市内で立ち上がってきているそれぞれのまちづくり、地域活性化の動きに拍車がかかるとともに、さらに市民の熱き思いを吸収しながら活動が展開されることを期待したい。（井阪、丸尾）